

平安儒者の家 大江家のひとびと

井 上 辰 雄 著

塙 書 房 刊

井 上 辰 雄 (いのうえ・たつお)

略 歴

1928年 東京生まれ
1952年 東京大学文学部国史科卒業
1957年 東京大学大学院（旧制）満期修了
熊本大学教授・筑波大学教授を歴任。文学博士。
筑波大学名誉教授。

主要著書

『正税帳の研究』（塙書房、1967年）
『火の国』（学生社、1970年）
『隼人と大和政権』（学生社、1974年）
『古代王権と語部』（教育社、1979年）
『古代王権と宗教的部民』（柏書房、1980年）
『常陸国風土記よりみる古代』（学生社、1989年）
『天皇家の誕生』（遊子館、2006年）
『古事記のことば』（遊子館、2007年）
『古事記の想像力』（遊子館、2008年）
『茶道をめぐる歴史散歩』（遊子館、2009年）
『常陸国風土記の世界』（雄山閣、2010年）
『和歌の文学と歴史辞典』（遊子館、2010年）
『嵯峨天皇と文人官僚』（塙書房、2011年）
『平安初期の文人官僚―栄光と苦悩―』（塙書房、2013年） 他

へい あん じゅ しや いえ おお え け
平安儒者の家 大江家のひとびと

2014年3月25日 第1版第1刷

著 者 井 上 辰 雄

発 行 者 白 石 タ イ

発 行 所 株式 会社 塙 書 房

〒113 東京都文京区本郷6丁目8-16
-0033

電話 03(3812)5821

FAX 03(3811)0617

振替 00100-6-8782

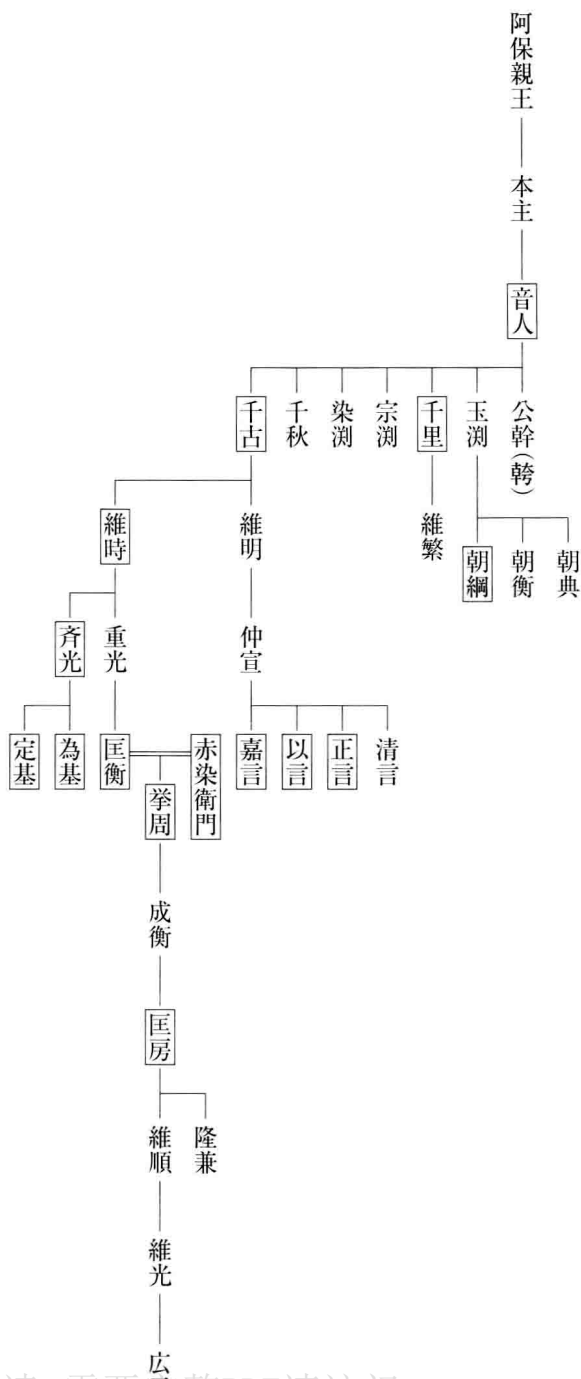
亜細亜印刷・弘伸製本

定価はケースに表示してあります。落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN978-4-8273-1265-2 C3021

平安儒者の家 大江家のひとびと

大江氏略系図（『尊卑分脈』を元に作成）



（ ）は、本書で採り上げた人物

目次

	序章 摂関政治と大江家の人々	1
I	大江音人―大江家の始祖―	9
II	大江朝綱(後江公相)―傑出した漢詩人―	49
III	大江維時(江納言)―三代の侍読―	81
IV	大江齊光―忠実な後継者―	109
	附・為基、定基―浄土教への傾斜―	
V	大江匡衡―道長の政治顧問―	129
VI	大江以言―漢詩人の矜持―	169
VII	大江拳周―鍾愛の息子―	209
VIII	大江匡房―栄光の文化人―	221
IX	大江千里と千古―叙情歌人と良吏の道―	265
X	大江嘉言と正言―弱者への視線―	281
XI	赤染衛門―摂関期の語りべ―	295

序章

摂関政治と大江家の人々

平安時代を通して、次々と卓越した儒者を輩出した大江家は、それぞれの時代に、天皇の学問の指導者となり、或いは、摂関家の政治的顧問の努めを立派に果たしつづけて来た。そのこののみを取り上げても、極めて歴史上において希有な意義を有していたといわなければならないと考えている。

平安時代といえ、概して所謂、国風文化のイメージが強い印象を与えるが、あくまで正式の「ハレ」の舞台や行政の世界では、律令体制の根幹をなす中国文化の圧倒的な影響のもとにあり、依然として、漢文の領域内に官僚群が置かれていたことを示している。

その漢文の世界を領導し、育成することを、一家の至上の使命として、子々孫々に伝えていった鴻儒の家は、菅原家と列んで、大江家であった。

大江家は、その初期の頃は、大枝家おおえと称していたが、それは恐らく、皇室という幹から分枝した家を意味していたのであろう。

『統日本紀』延暦八年（七八九）十二月丙申（二十九日）条に、桓武天皇の御生母、高野新笠たかののしんかさの崩御を伝えた記事の中に、新笠の母は、

贈正一位大枝朝臣真妹おおよえあそんまいも

と記されているが、『統日本紀』延暦九年（七九〇）十二月壬辰朔条に、

朕（桓武天皇）外祖父高野朝臣、外祖母土師宿祢、並追贈正一位。其改土師氏、為大枝朝臣。……亦宜菅原真仲、土師菅麻呂等、同為大枝朝臣。一矣

と見え、大枝朝臣は菅原朝臣と同じく土師氏を祖としていたことが知られる。

つまり、大枝氏は、学問の家として栄えた菅原氏と同族であったが、平安の初め頃に、歴代偉れた学者を生み

だした菅原家より、大枝家の学問の世界への進出は、やや遅れていたようである。

学者の家としての大枝家の祖は、江相公と称された大枝音人である。音人は大枝本主の子とされるが（『三代実録』元慶元年（八七七）十一月庚子条）、『公卿補任』貞観六年（八六四）条には、「平城天皇曾孫、阿保親王孫……母中臣氏（阿保親王侍女）」と註記されている。これによれば、音人は在原行平や業平を叔父とする人物ということになる。

その音人の、学問上の師は、道真の祖父菅原清公であり、清公の息子、是善とは同門の誼を結んでいたというのである（『三代実録』元慶元年十一月庚午条）。この事より、大江家の発足の時期は、同族菅原氏とは学問を通して、硬く結ばれており、平安時代を通じて、競い合つて来た仲であることを示している。

『江吏部集』中「喜愚息举周賜学問料、聊写所懷寄呈廊下諸賢」において、

菅江両家始祖、建立文章院東西曹。爾後二百年。箕裘之業、于今不絶、有所感有此句。

と註していることから、叩首することが出来るであろう。

因みに、文章院は、大学寮紀伝道の講堂である。その東曹を大江家が、西曹を菅原家が管理していたのである。

菅原氏は道真の受難のあとも、文時や輔正などの英才を輩出して来たが、大枝氏（大江氏）も、それに劣らず傑出した学者や漢詩人を次々と生み出していった。

とりわけ、音人—千古—維時—重光—匡衡—举周—成衡—匡房の流れは、ほぼ一世代おきに、音人、維時、匡衡、匡房の如き、当代最高の文人官僚を世に送っている。

勿論、大江（大枝）氏の活躍した時代は、嵯峨天皇の弘仁朝を頂点とする「文章は経国の大業」という必ずし

も恵まれた時代ではなかった。弘仁期を中心とする時期は、天皇自らその身分を問わず、有能な人材を次々と抜擢して、「文人官僚」とした時代であるが、大江氏の活躍した時代は、既に藤原北家を頂点とする摂関政治の時期であった。

それ故、大江氏は一方において、文章博士、侍読となり、朝廷の学問の師となることを誇りとしながら（『江吏部集』中、『群書類従』第九輯）、一方においては、摂関家の政治顧問の役に甘んずる他はなかったのである。

匡衡は、『江吏部集』中（『群書類従』第九輯）に、

昔高祖父江相公（大江音人）、為忠仁公（藤原良房）之門人、備顧問。祖父江中納言（大江維時）為貞信公（藤原忠平）之門人、備顧問。皆蒙不次之賞、列卿相。今匡衡為相府（藤原道長）之家臣、時々備下問、有所發明。

と記している。それを、自讃と読むにしても、多少の悔悟の念が含まれているようである。

音人、維時までは、参議に列することが許されたが、平安末期に至り匡房が参議に任ぜられる間は、ほとんど式部大輔を極官とする地位に甘んずるよりほかはなかったのである。皇室の分枝たる大枝として、朝政の最高審議官たる参議以上に登る夢は鎖されていたのである。

しかし、大枝（江）家は、千古維時流だけでなく、朝綱あそつな、以言もちことばの如き、当代一流の漢詩人を世に送り出している、漢詩の世界をリードしていったのを、家門の誇れとしていたのである。

大江家代々において、特に匡衡まさひらや匡房まさふさの世評は高く、その死に臨みては匡衡は「当代名儒、無人比肩」（『小右記』長和元年七月十六日条）と評され、匡房も「三代侍読、才智過人、文章勝也、誠是天下明鏡也」（『中右記』天永二年十一月五日条）と惜しまれたという。

匡房の『江談抄』第五―七三「都督自讃事」にも、「云官爵、云福祿、皆以文道之徳所経也。何況才芸名譽、殆過於中古之人、所思給也」と述べ、官位を「文徳之道」なりと自讃しているのである。

同じく『江談抄』第五―七四「都督自讃事」には、自らの一生を回顧して、

取身自讃有十余、其中、八歳通史記。十六歳作秋日閑居賦。其一句云、李広漢室之飛将也、卜宅於隴山、范蠡越国之賢相也、避祿於湖水云々。明衡朝臣深以感之。又落葉埋泉石詩、羊子碑文風裏隱、淮南葉色浪中深云々。安樂寺御殿鳴序一句曰、堯女廟荒、春竹染一掬之淚、徐君墓古、秋松懸三尺之霜、雖垂異代之名、皆非同日之論云々。又云、自高麗申醫師返牒云、双魚猶難達鳳池之月、扁鵲何入鷄林之雲。是則承曆四年事也。其後赴鎮西之日、宋朝賈人云、宋天子有鍾愛賞翫之句、以百金換一篇之句也。

（身に取りての自讃は十余り有り。その中に、八歳にして史記に通ず。四歳にして書を読めり。十六歳にして「秋日閑居の賦」を作る。その一句に云はく、「李広は漢室の飛将なり。宅を隴山に卜す。范蠡は越国の賢相なり。祿を湖水に避く」と云々。明衡朝臣、深くもつて感ず。また「落葉泉石を埋む」の詩に、「羊子の碑文は嵐の裏に隠る。淮南の葉の色は浪の中に深し」と云々。安樂寺の御殿鳴るの序の一句に曰はく、「堯女の廟は荒れて、春竹は一掬の涙に染まる。徐君の墓は古りて、秋松三尺の霜を懸けたり。異代の名を垂るといへども、皆同日の論にあらず」と云々。また云はく、「高麗より医師を申す返牒に云はく、「双魚なほ達し難し鳳池の月。扁鵲何ぞ鷄林の雲に入らん」と。これすなはち、承暦四年（二〇八〇）の事なり。その後鎮西に赴く日、宋朝の賈人云はく、「宋の天子の鍾愛賞翫有る句にして、百金をもつて一篇に換ふる句なり」と。）

（岩波、新日本古典文学大系『江談抄、中外抄、富家譜』後藤昭雄、池上洵一、山根対助校注）

と自ら誇っている。

恐らく、摂関政治華やかなりし頃、高位高官は、藤原北家や臣籍降下の源氏によって、政權は独占されているが、「文章は経国の大業」を自負する文人は、中国の宋や高麗までも日本人の名を高められるのは、漢詩人たる自分達であると自負しているのである。

匡衡も『江吏部集』中「冬日於三州廟賦詩」に於いて、

夫詩著、群德之祖。萬福之宗也。動天地感鬼神、莫先於詩焉

と述べ、詩人としての自負を吐露している。

『江吏部集』中「述懷古調詩」には、匡衡が十三歳で元服した際、祖父維時は、

捉耳殷勤誠。努力可攻堅。我以稽古力、早備公卿員。汝有帝師体、必遇文王田

と激励されたという。事実、

頃年以累代侍読之苗胤、以尚書部十三卷、毛詩一部廿卷、文選一部六十卷、及礼記、文集侍聖主御読

〔『江吏部集』中「李部大卿、述沈滯懷、忝賜玉章、聞声相應敢押本韻」〕

と記し、大江家伝統の「侍読」を匡衡も立派に果たしていることを、この上もない名譽としているのである。

このような「侍読」をことさらに自讃するのは、匡衡の卓越した才能をもつてしても、遂に参議に列することが叶わなかったからであろう。『日本紀略』の三条天皇の長和元年（一〇二二）七月十六日条に、

今日、式部大輔大江朝臣匡衡卒、年六十一

と見え、極官は匡衡の才をもつてしても式部大輔であった。

だが、摂関政治の全盛が過ぎ、院政期に入るや、匡房は左大弁、式部大輔を歴任した後は、参議に列し、権中

納言、大宰権帥を歴任し、白河院の近臣として、華やかな活動の場が与えられることになる。

その匡房でさえも、

只所遺恨ハ不_レ歴藏人頭子孫和呂クテヤミヌルトナリ

(『江談抄』第五―七三「都督自讃事」)

と述べ、匡房の業績を継承すべき子孫に恵まれなかった事を慨歎している。

事実、匡房には隆兼、維順このりという息子がいたが、隆兼は康和四年(一一〇二)に早世し、維順は匡房の跡を継いだ。だが、大学頭、式部(権)大輔などを歴任し、正四位下まで至ったが、遂に参議に列することはなかった(『尊卑分脈』、「大江氏系図」(『群書類従』第五輯「系譜部」)。

しかし、大江氏の文化的評価には、儒者ばかりでなく、優れた歌人を少なからず世に送り出していることを見落としてはならないのである。

大江千古や大江千里、大江ちかよ為基なめしなどの歌人は、漢字の出身でありながら、著名な歌人として活躍している。これらの歌人は、大江家伝来の漢詩文の世界を離れ、官界の顧問たる使命から脱却し、摂関政治の矛盾を外から眺めることで、薄幸の人々に熱き涙をそそぐことが出来たのである。その事は確かに大江家の伝統から身を疎外されたこととなるが、アウトサイドから大江家を彩ったと評すべきだと考えている。それ故、あえてこれらの人々を、定基らの宗教人を加えて、この論考に付加したのである。又、その周辺には、維順の娘や、赤染衛門がいたのである。

一つには、赤染衛門が『栄花物語』を執筆する際は、紀伝道の大家、大江家の伝統が役立てられていたことも注意すべきであろう。勿論、『栄花物語』が正史と異なることは、いうまでもないが、中国の歴史書に通ずる

大江氏の影響も少なくないと思われるのである。

このように大江氏一族が平安朝文化の各分野に大きく寄与し、優れたリーダーとしての役割を、充分果たしつづけて来たのである。

しかし意外なことに、今まで平安期の大江氏の果たして来た優れた役割と文化的影響を、大系的に纏め上げた論稿は余りにも希有であった。それ故、今、菲才をかえりみず、『平安儒者の家―大江家のひとびと―』と題して、その意義を呈示していきたいと望んでいるのである。大方の御叱正をお願いする次第である。

I
大江音人—大江家の始祖—

平安初期に於いて、

小野 篁、詩家之宗匠。はるすみのよしつな おおのののおとむ 大江音人、在朝之通儒也

（『三代実録』元慶四年八月辛亥条）

として、「文人官僚」の代表的人物として、高く推挽されたひとりに大江音人が挙げられている。

音人は、「右京人 備中権介正六位上 本主之長子也」（『三代実録』元慶元年十一月庚子条）と見え、音人を大江本主の嫡子と記されているが、『公卿補任』貞観六年条を繙くと、音人を「平城天皇曾孫 阿保親王孫 備中介正六位上大枝本主一男。母中臣氏阿保親王侍女」と註している。

更には大江匡房の『続本朝往生伝』四―五には、「大同（平城天皇）の後の阿保親王の子なり」として、阿保親王の御子と伝えている。

『続本朝往生伝』の所伝が信ぜられるとすれば、大江音人は当然ながら、阿保親王の御子である在平ありはらのありひらや業平なりひらと異母兄弟の間柄となり、阿保親王は、音人を身籠った侍女を桓武系に連なる大枝本主に押しつけ、音人を本主の子としたと考えなければならないのである。

又、音人が阿保親王の孫とすれば、阿保親王の御子が阿保親王の侍女を孕ませ、音人を妊娠したその侍女をやむなく大枝本主に嫁がせ、音人を出生したと見るべきであろう。

その当時から大江音人の出生の秘密について噂がとびかい、音人は桓武天皇の皇子阿保親王の血脈に連なっていると思われるようである。その真相は必ずしも明確ではないが、大枝（江）氏もともと桓武系の末流であつたから、鴻儒と讃えられる音人の出自を、より同流の高貴性に結びつけるようになったのかも知れないと推測しているのである。

勿論、平城天皇の皇統は、所謂、葉子の変以後は、傍流に置かれ、嵯峨天皇を祖といただく皇室にあつては、